

# 世界の人事は こうなっている

リクルートワークス研究所 グローバルセンター長 村田弘美



第8回

## 小中学生からのキャリア教育 (米国)

米国の2月といえば、米国最大のスポーツイベント、NFLのスーパーボウルが広く知られていますが、毎年2月2日に全米一斉に行われる職業教育イベント「ジョブシャドウ」も有名です。ちなみに同日は、冬眠から目覚めたグラウンドホッグ（リスの仲間）の様子をみて春の訪れを占うグラウンドホッグ・デーでもあります。

さて、ジョブシャドウは、1998年の開始以降、全米で約100万人の小中学生、約10万の企業・団体が参加するイベントです。生徒たちは、自分の興味のある職業で働いている社会人に、丸一日、影のように密着し、ふだんの職場の様子を観察します。日本でもワンデー・インターンシップが定着してきましたが、米国では、子どもたちの発達段階に合わせて、小中学生向けのジョブシャドウ、高校生向けのサマージョブ、大学生向けには長期にわたるインターンシップと、継続的に3つのキャリア教育が提供されています。

ジョブシャドウは、職業の“リアル”を知ることが目的として、地域ごとに、将来、人材の需要が見込まれる分野を中心に開催され

ます。たとえば医療分野の人材不足は喫緊の課題ですが、大人になってから「医師になりたい」と希望しても、キャリアチェンジするのは非常に難しい。

ただ、医療分野は医師や看護師以外の関連職種も多く、現場ではさまざまな技術をもった人たちが連携して、チームで働いています。それを知ってもらい、1人でも多くの生徒が将来の職業選択の際に医療分野を選択肢に入れてくれることを期待して、取り組みを行っています。実際に体験させてみると、「ゲームが得意な生徒は内視鏡の操作も得意」などという発見もあるそうです。

ジョブシャドウは、生徒の就業観を養い、学習意欲の向上にも貢献するため、教育関係者の評価も非常に高い取り組みです。生徒は経験を通じて、自分が希望する職業に就くためには、どのような高校や大学に進学し、何の技術やスキルを習得すればよいのかということ具体的にイメージし、行動するようになります。職業別労働市場の米国では、早期に就業観を育てることは、大きな成果へとつながります。

事前に学校側が生徒たちに希望職種を聞き、マッチングしますが、企業の開拓や当日運営など学校だけでは負担が大きく、導入が難しい場合は、仲介機関がサポートします。また、インターネット上でのバーチャルジョブシャドウが活用されることもあります。

その後、職業体験プログラムは、高校の夏休みを利用した就業体験・サマージョブや、大学では、数カ月から数年という比較的長い期間をかけたインターンシップへと姿を変えていきます。前者は大学の学部学科など、進路選択に大きな影響を与えますし、後者は企業の新卒採用に直結した選考プロセスの1つになっています。インターンシップでリアルを知り、互いを評価し、メリット／デメリット、強み／弱みなどを十分に理解する時間をもつことは重要です。

就業体験は学業によい影響を与えるといわれる一方、経験が不足したまま職業に就くと、離職率が高くなることが懸念されています。日本においても、学業と実社会との連鎖の方法を、あらためて見直す時期に来ているように思います。